

大阪フロイデニュース

Freude

vol. 13-15 2019. 11. 27. wed

今号は字だらけっ

大阪フロイデ合唱団 Tel 06-6358-2626
〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-18-4B
ホームページ <http://www.osakafreude.com>
メールアドレス info@osakafreude.com

次のコンサートが決まりました (● ^ 〇 ^ ●)

2021年2月10日 (水) いずみホール (オケ合せは2月8日 (月))

モーツァルト「すずめのミサ」K220 (1775) (約17分)

ハイドン「テレジア・ミサ」(1799) (約45分)

え? 2月? だいぶ先じゃない?とお思いのアナタ!? 大阪フロイデでは、練習期間をおおむね8ヶ月確保する演奏会スケジュールにしているの、計算上は2020年12月となります。が、、、第九の季節にぶつける!? う~ん、諸々キビシイ、、、では1月? それだと、本番直前にお正月休みが入るとよくないんじゃない? 等々の検討の結果、2月の本番となりました。

そして曲目! 今、モーツァルトとハイドンに取り組んでいますが、みんな奥深さを痛感しているはず! ということで、もうちょっと追求しようやないか、という選曲です(^_^)

「すずめのミサ」は、今回の「三位一体の祝日のミサ」の2年後、やはり、コロレド大司教の時間制限のもと作曲されたものですが、サンクトゥスとベネディクトゥスでのヴァイオリンが雀のさえずりのように聴こえることから、この愛称がつけました。短いですが、モーツァルトの魅力が詰め込まれた、キラキラと明るく楽しくうれしくなる音楽です。

「テレジア・ミサ」は、「ネルソン・ミサ」同様、ハイドンの後期6大ミサのひとつです。オーストリアの君主ヨーゼフ二世は1782年、教会の勢力をそぐために多くの修道院を閉鎖してしまいました。ミサの新曲も禁止! それはヨーゼフ二世1790年に亡くなるまで続きました。没後、晴れてミサ新曲解禁! 貴族たちが新曲をオファーしたいと思ったころ、ハイドンはエステルハーシ家を離れ、イギリスで忙しく大活躍中。しかし、エステルハーシ4人目の当主ニコラウス二世が「また、楽長として戻ってきて!」とラブコール。そして「侯爵夫人マリア・ヘルメネギルトの命名祝日のために毎年新しいミサ曲を作曲するように」命じたのです。それが6大ミサ。「戦時のミサ」「ハイリッヒ・ミサ」「ネルソン・ミサ」「テレジア・ミサ」「天地創造・ミサ」「ハルモニ・ミサ」を1796年以降毎年タイミングで作曲します。「テレジア・ミサ」の名前は、エステルハーシ家での初演の後、オーストリア皇帝フランツの二度目の王妃マリア・テレジア(有名な女帝マリア・テレジア(1717~1780)とは別人)に献呈されたことにより、「テレジア・ミサ」の愛称がつけました。

今、苦労している「ハハハ・・・」とか「ヘヘヘ・・・」とか、今回限りじゃもったいない! さらに極められますよ~。

そして、今回、ステキに演奏(そんでをもって、客席もいっぱい)すれば、その発展編である次回演奏会に向けて、お客様から「あそこで一緒にうたいたい!」と思ってもらえるよね!

1/20 練習 ⇒ 読み合わせの練習? ハイドン Agnus Dei も やってよ!!

★ 女声はスラ-の音区ありのハイドン Credo 226 ~ 230, 94 No. 7, 96 No. 2a 234 ~ 239 はスラ-付。(男声は楽譜とあり)

ハイドン&モーツァルト連載「ふらっぴのわがりにくい」声におこたえに 今号はハイドン - 挙揚載?

(モーツァルトは 近々に?) 1/13号掲載の「少年時代に」からのつづき

「ハイドンとモーツァルトのこと、知っておこう」(ネットつまみぐいゴメン) シリーズ その3 国本静三「ハイドンの生涯」

<エステルハージ家時代>

1759年頃、ボヘミアのカール・モルツィン Karl von Morzin 伯の楽長の職に就いた。小さなオペラを指導し、またこの合奏団のために初めての「交響曲二長調 Hob. 1-1」を作曲している。その後、モルツィン伯が経済的に苦しい状況になり、ハイドンは解雇されてしまう。1760年、マリア・アンナ・ケラー Maria Anna Keller と結婚した。

すぐに1761年、西部ハンガリー有数の大貴族エステルハージ Esterházy 家の副楽長という仕事を獲得。老齢の楽長グレゴール・ヴェルナーの死去(1766年)にともない、楽長に昇進した。この時よりハイドンはエステルハージ家の御用音楽家として、エステルハージ家の主要な3つの宮殿や屋敷に移り渡って仕事をしなければならなかった。ハンガリー西部アイゼンシュタット(現在ブルゲンラント州都)の屋敷、ウィーンの宮殿とアイゼンシュタット東部エステルハーザ宮殿(現在ハンガリーのフェルテード)である。これらのための作曲やオーケストラの運営、室内楽やオペラの上演などの責任者となった。エステルハージ家当主ニコラウス・エステルハージ侯爵は、音楽のよき理解者であった。ハイドンの作品に理解を示している。ハイドンの創作環境を整えた人物といえる。

ハイドンはほぼ30年間エステルハージ家で働き、数多くの作品を作曲する。彼の作曲様式も向上し、エステルハージ家ばかりでなく外の世界でもハイドンの人気は上がる。徐々にエステルハージ家のためだけではなく、外部や出版のために曲を書くようになった。この時期の重要な作品としては「パリ交響曲 Hob. 1-82~87」(1785-86年作曲)、「十字架上のキリストの最後の7つの言葉 Hob. 20-2」(1786年作曲)といったものがあげられる。これらの作品は外国からの依頼により作曲された。

1781年頃からハイドンはモーツァルトと親しくなる。ハイドンとモーツァルトは弦楽四重奏を一緒に演奏するなどして交流を深めていく。ハイドンはモーツァルトの作品に深い感銘を受け、モーツァルトの最も得意とする分野といわれるオペラや協奏曲の作曲をほとんどやめてしまったといわれている。モーツァルトの方はハイドンから多くの啓発を受けた。ハイドンの6曲「弦楽四重奏曲<ロシア四重奏曲> Hob. 37-42」に、モーツァルトはその完成度の高さにたいへんな感銘を受けたといわれている。たしかに古典的様式の完成を示すものとして今もなおその音楽史的価値はゆるがない作品群である。

<その後>

1790年、エステルハージ家のニコラウス(ミクローシュ)侯爵が死去した。その後継者パウル・アントン Paul Anton (パール・アントル Pál Antal) 侯爵は音楽に全くといっていいほど関心を示さなかった。音楽家をほとんど解雇し、ハイドンをも年金暮らしにさせてしまった。ただしハイドンからみれば自由に曲を書く機会が与えられ、生活の基本となる最低収入が保障されるという生活を送ることができた。ハイドンには悪くない面も多くあって、それまでにできなかった作品を仕上げることもできた。さらにドイツで活躍する音楽関係の興行主ヨハン・ペーター・ザロモン Johann Peter Salomon (1745-1815) から舞い込んだ仕事、すなわちイギリスで新作の交響曲を管弦楽団で演奏するというプロジェクト計画を受け入れた。

1791年~1792年と1794年~1795年の2度のイギリス訪問は大成功を収めた。聴衆はハイドンの協奏曲を聴きに集まり、すぐハイドンは富と名声を得た。なお、このイギリス訪問の間に、ハイドンの最も有名な作品の数々、「交響曲第94番長調 Hob. 1-94<驚愕>」、「交響曲第100番長調 Hob. 1-100<軍隊>」、「交響曲第103番変ホ長調 Hob. I-103<太鼓連打>」、「交響曲第104番二長調 Hob. 1-104<ロンドン>」(ロンドン第2期の最後の交響曲で、ロンドンでの交響曲は全12曲。これらはロンドンセットといわれる)、「弦楽四重奏曲ト短調 Hob. 3-74<騎士>」や「ピアノ三重奏曲ト長調 Hob. 15-25<ジプシー・ロンド>」などの名曲が作曲されている。

ハイドンはイギリスの市民権を得て移住することも考えたが、最終的にはウィーンに帰る。ハイドンはウィーンに自らの大邸宅を建て、合唱やオーケストラのための宗教的な作品の作曲にとりかかる。この時にオラトリオ「天地創造 Hob. 21-2」と「四季 Hob. 21-3」、そしてエステルハージ家のためにミサ曲を6曲を作曲している。

こうしたハイドンにはあわただしい時期、1792年に古典派時代最後の星となるベートーヴェンがドイツのボンからウィーンにやって来た。ボン宮廷音楽家の立場で1年間の予定でウィーンに留学滞在するつもりであった。だが再びライン川沿いの美しいボンに帰ることはなかったのである。ベートーヴェンはアルザーシュトラッセ45番地のリヒノスキー侯爵の持ち家に落ち着き、ハイドンのもとで作曲のレッスンを始めた。ウィーンの名家の出であるヴァルトシュタイン伯爵の尽力により上流社会と知己を得て、ピアニストとしてウィーン貴族たちの寵児となっていく。それはボン時代にオルガニストとして身につけた即興演奏とネーフェから学んだレガート奏法とカンタービレ奏法が効をなし、人々の心を捉えたようである。

ハイドンの元での勉強は1792-04年まで続くが、多忙でしかも60歳の師の元では22歳の弟子にとっては満足のいく結果は得られなかったようである。しかし師ハイドンに捧げられたベートーヴェンの3曲「ピアノ・ソナタ第1番~第3番 Op. 2-1~3」(1793-94年作曲)や以後のベートーヴェンの作品群が、ハイドンから直接間接よい啓発と影響を受けたことが明かに示している。

来週チラシカに来るよ〜

★チケット関連スケジュール!

- 12/4 (水) チラシ完成・練習会場に納品されます。
- 12/8 (日) チケット説明会 (練習後。チケット担当の宮下さんから申し込み方法等説明。)
- 12/18 (水) チケット団内申し込み開始

チケットの受け取りは、1月からです (具体的日程はチケット説明会にて発表)
支払いも、チケット受け取り以降ですので、まずは、どんどん申し込もう!

1796年にハイドンはエステルハージ家楽長に再就任し、エステルハージ家もこの頃までにまた音楽に理解あるニコラウスII侯が当主になっていた。楽長の職務は以前とは比べものにならない軽さだった。この時ハイドンはすでに64歳であったが、創作意欲は衰えることはなかった。生涯に83曲作曲した弦楽四重奏曲の最後の9曲 (「五度」「皇帝」「日の出」など) を作曲している。そして晩年の9つの「ミサ曲 Hob.22-9~14」、2つの大作「天地創造 Hob.21-2」(1796-98年作曲、独語)、「四季 Hob.21-3」(1799-1801年作曲、独語) はみごとな作曲活動であった。

1802年、ハイドンはほぼこの年で作曲活動は終わる。それは持病が悪化し、もう作曲ができないほど深刻なものになっていた。これは新しいアイデアが次から次へと湧いてくるハイドンにとって、耐え難いものであったことは間違いない。それでも最後の弦楽四重奏曲となる「弦楽四重奏曲変ロ長調 Hob. 3-83」(未完成、1803年作曲) を手がけていた。

晩年、ハイドンは使用人に看護され、多くの見舞いの客が訪れたという。ハイドンは時々ピアノに向かい、自分でかつて作曲した「神よ、皇帝 [フランツ] を護りたまえ Hob.26-43」(1796/10-1797/1 作曲、第2次大戦前までドイツの国歌・オーストリア=ハンガリア帝国の国歌となり、歌詞を変更して第2次戦後西ドイツ国歌を経て現ドイツ連邦共和国国歌となっている) を弾くことを慰めとしていたようである。これは「弦楽四重奏曲ハ長調 Hob. 3-77<皇帝>」(1797年作曲) の第2楽章に引用された変奏曲となっている。

1809年、ハイドンは、ナポレオンがヴィーン侵攻中に死去した。ハイドンの最後の言葉は、近くに大砲が命中して混乱している使用人たちを何とか落ち着かせようとするものであったという。遺体はアイゼンシュタットに葬られた。だがハイドンの埋葬された遺体には奇妙な出来事が起こっていた。それは頭部と胴体が150年間切り離されていたというものである。ハイドンの死後、オーストリアの刑務所管理人であるヨハン・ペーターと、かつてエステルハージ家の書記だったローゼンバウムが首を切り離した。彼らは熱烈なハイドン崇拝者だった。頭蓋骨を持ち去り、丁寧に薬品処理を行なうなどして保存し続けたという。しかし、隠し事があらわにならないことは無い。頭蓋骨は1954年になってやっとアイゼンシュタットの墓所の胴体に戻ることができた。現アイゼンシュタットはオーストリア東部の都市で、ハイドンが長年仕えたエステルハージ家エステルハージ宮殿があるブルゲンラント州の州都である。 / ハイドンもあかてり (笑)



12/4 (水)
18:30~
堀江PUB

12/8 (日)
13:15
小田代S4P
JR 尾崎

12/11 (水)
18:30
堀江
PUB

12/18 (水)
18:30~
堀江PUB